

プロジェクト研究

ドイツ現代文化研究会報告(二〇一四年度)

名古屋市立大学大学院人間文化研究所 土屋 勝彦

例年通り、場所は名古屋市立大学
滝子キャンパス一号館五一五号室
(国際文化学科会議室) である。

日時：三月二二日(土曜日) 一六
時から一八時まで

詩人アン・コッテン・文学におけ
る日本のモチーフをめぐる

今回の朗読テキストは、未刊の
最新の散文である。まず「民主主
義」「人権」「平和」「福祉」「社会
保障」「自由」といった資本主義
国のお題目が並べられ、それらが
偽善や矛盾を孕む概念であること
が示唆される。「キノ カワザ」
という「武道」の名前を持った女
性の語り手が登場し、友人と一緒
に図書館を出て歩きながら虚飾の
スローガンを批判的に省察してい
く。ラカン派の現代哲学者アラ
ン・バディアウの著作を回顧しつつ、
二人の友人ジョニーとプレツと落
ち合い一緒に歩いて行く。二人の
奇妙な身振りと行動、それに街の

光景が交錯しながら、語り手は自
己の認識世界に没入して省察す
る。身振りと光景、省察が交錯し
ていく形式は、エッセイや詩、散
文が一体化した独自のポストモダ
ン的な文学世界を展開している。

討論でも、通常の筋を持った散文
や物語ではないので理解しにくい
という声も聞かれたが、本来詩人
であるコッテンさんの文学は、イ
ロニーと認識不能性をテーマとし
て併せ持ちながら優れた言語芸術
であるとして高く評価されている。
最新作の『身震いする扇子』で
も、愛の不在をテーマとして、日
本、ウクライナ、ベルリンを舞台
にしつつ、遊技的かつ奔放な言語
表現によって、哲学的省察と詩的
メタファーの境界領域を縦横に移
動していく。そこに性転換への渴
望、美の理想、感情の昇華などの
テーマがイロニーに満たされて浮
上していく構造になっている。

四月一七日 ローベルト・ユンク
展示と名大名誉教授・若尾祐司
氏の特別講演会(客員教授ユー
ディット・ブランドナー氏の講義
との関連で共催)

四月二六日(土曜日) 一六時より
作家ペーター・ジューモン・アルト
マン朗読会

朗読作品『帰郷者』(二〇一二年)
はホフマンスタールの『帰郷者の
手紙』(一九〇七年)をヒントに
した小説で、妻子との別れなどか
ら生ずる語り手の生存・現実空虚
感の吐露に始まり、韓国の恋人と
のスカイプによる交信場面におけ
る愛への傾斜と離反、そして国木
田独歩を翻訳する語り手による、
主体なき自然描写で終わる。舞台
は京都、韓国、ザルツブルクを往
還し、日記風、エッセイ風、省察
風の筆致でコンパクトに描かれて
いる。中編小説で読みやすいが、
日本的な主体と客体の一体化した

視線(水墨画)への憧れには、や
やステレオタイプな日本の美意識
が看取される。アルトマンさんは
気さくな人柄であり、なかなかの
勉強家でもあり、日欧の比較文化
的な意見交換ができてよかったと
思う。

六月九日(月曜) 一六時二〇分ー
一七時五〇分

オーストリアの詩人ルボルミルス
キさんの朗読会

今回はゼミ学生たちも参加したの
で、詩人の詩編と散文の一部を日
独両言語で朗読した。詩編は人生
を省察するアフォリズム風のもの
と、ギリシャ神話などを素材とす
る古典的なものに分かれるが、い
ずれもペシミズムと寂寥に刻印さ
れた詩風で、短詩形には日本の短
歌や俳句を思わせるようなスト
イックな自然詩の要素もみられる。
ルボルミルス詩集の諸批評で、ト
ラークルから始まるオーストリア
のペシミズム詩人の系譜に入れ
ているとおり、いずれも人生賛歌
ではなく孤独と死をテーマとしな
がらも、アンチキリストや無神論
に傾くことなく独特の宗教性を宿
しているようである。散文のほう
は、詩人の母親をモデルにしてお
り、オーストリア・ハンガリー二

重帝国の終焉から第二次大戦勃発までの過酷な家族史を彷彿させるものであった。言葉とリズムの持つ強い形象性が印象的である。議論では、詩人の着想やイメージの沸き上がるプロセスについて、ギリシャ神話への親和性の由来などさまざまな観点から有意義な意見交換ができた。

一〇月一八日(土曜) 一六時半より ドキメンタリー映画「異郷の中の故郷ーリービ英雄五二年ぶりの台中再訪」上映とアフタートーク(小説家・温又柔、映像作家・大川景子、詩人・比較文学者・管啓次郎、土屋)を行った。本作は、越境作家リービ英雄さんが少年時代を過ごした台中に足を踏み入れ、当時の追憶がよみがえってきたときの複雑な感情がその背中をとおして伝わってくる感動的な映画であった。大川景子監督の距離を置いた静謐な撮り方が光る場面である。その後の討論では、大川さんが撮影に関する思い出を、管啓次郎さんと温又柔さんには、リービさんの文学への想いと作品の特質についての確に熱く語っていた。温さんのことば:「異郷の中の故郷」で、リービ英雄はよく喋る。まるで、言葉にできない、

あるいは、ならない部分に触れてしまふのをひどく恐れているかのように。そうであったからこそ、饒舌だったかれの声が途切れたとき、そこにいたのは、言語以前の感情を感情として、どのような言葉に置き換えることもなく、ただ呼吸していた頃の、小さな少年そのものだった。」

一〇月一四日の報告

私たち研究会グループが昨秋北海道大学で行った日本独文学会でのシンポジウムをまとめた論集『フロイトの彼岸』(日本独文学会研究叢書)が出版された。構成は次の通り..

「はじめに」 土屋勝彦

鶴田涼子

「魔的なるものへの視座ーフロイトとゲーテ」

山尾涼

「世界の破れ目と回帰する「身体」ーフロイトとカフカにまつわるアントロポロジー」

「カフカにおける虚構の死ーフロイトの「死の欲動」との関連から」

山本順子
「集合的意識のアレゴリーーフロイトとベンヤミン」

鈴木國文

「Freudの精神分析理論ーフランスにおける受容と変容と現象」
代思想への影響」

討論記録

一月一七日(月曜) 一六時半ー一八時半 ザビーネ・グルーバー朗読会

今年度のオーストリア現代文学ゼミナールの招待作家グループバーサーンの朗読会を行った。イタリア国籍で南チロル出身のグループバーサーンは、繊細で詩的かつ重厚な文体により評価の高い作家の一人である。参加者は少なかったが、その作品に見られる歴史文化的な諸問題、つまり両大戦前後から領土問題や自治権、ドイツ・ナチズムとイタリア・ファシズム、イタリアとオーストリア、テロリズムなどの歴史的な事件に翻弄され続けた南チロルの複雑な状況について討論し、充実した朗読会になった。
二〇一五年一月中旬以降に作家リーディア・ミッシュケルニクさんの朗読会を行う予定。
研究会のホームページは
<http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~tsuchiya/Germany.html>
である。

